

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科での研修を終えて

宮崎大学医学部外科学講座

樋口 和宏

この度、令和5年1月10日から2月3日までの4週間、日本臨床外科学会国内外科研修制度を用いてがん研有明病院大腸外科で研修をさせていただきました。私は医師9年目の外科医ですが、これまで経験してきたのは主に腹部救急疾患や鏡視下手術の適応となりにくい高度進行癌や肝胆膵外科領域の手術、消化器内視鏡処置が中心であり、消化器外科医として広く修練を積んできたものの、胆嚢摘出術を除いた鏡視下手術の執刀経験はわずかなものでした。医局関連病院から大学病院へ戻り、食道・胃・甲状腺手術を半年間学んだのち、大腸グループで鏡視下手術を始めて間もないタイミングでの研修となりました。1例でも多くの手術を見学したいとの思いから、日本一の大腸癌手術症例数を誇るがん研有明病院大腸外科での研修を希望しました。また、レジデントの先生方がどのようなトレーニングをされているのかにも興味がありました。研修開始時はCOVID-19感染の第8波の真っ只中でありました。負担が増した中でも研修を受け入れてくださった、がん研有明病院院長の佐野武先生、大腸外科部長の福長洋介先生、スタッフやレジデントの皆様には心から感謝申し上げます。

研修では、手術見学、カンファレンスへの参加に加え、数例スコピストとしても手術に加えていただく機会を頂きました。連日3～6例の大腸癌定例手術に加え、婦人科を中心とした他科の応援にも多数駆けつけておられ、スタッフ・レジデントの先生方は多忙を極めておられました。その中でも、スタッフの先生方は膜1枚レベルでの正しい剝離層を徹底した手術指導を行いながら、ほとんど出血なくスムーズに手術を進めておられ、大変感銘を受けました。レジデントの先生への指導内容は鏡視下手術初心者の私にとって大変ためになるものであり、手術中メモをとるのに必死でした。研修期間中は下部直腸癌の症例が多く、ロボット支援下でのISRやAPR、側方郭清など、私がこれまであまり出会う機会がなかった術式を多数見学することができました。福長先生のPull through法を用いたISR、二期的再建はこれまでなかなか目にするものではなく、特に印象に残りました。私はこれまで下部直腸癌手術の経験に乏しく、骨盤内の解剖に関してよく頭の中でイメージできていない部分も多かったですが、手術書・解剖書と術前画像の読み込み、実際の手術見学を繰り返すことで理解が深まったように思います。スタッフ・レジデントの先生方は未熟な私の質問にも丁寧に答えてくださいました。大変感謝しております。下部直腸癌手術では、術前治療後で剝離層を見極めるのが難しい症例が多数ありましたが、有効な視野展開を行って正しいラインで出血させずに手術を進める術者の先生と、それを阿吽の呼吸でサポートする助手の先生の力量に圧倒されました。宮崎大学では2022年7月にロボット支援下直腸癌手術が始まりましたが、まだ、なかなか助手のサポートがうまくできないことも多いため、チームの一員としてロボット支援下手術にも習熟していかなければならないと思いました。

カンファレンスは、火・木曜日朝の消化器外科カンファレンス、火曜日夕方の大腸外科カンファレンスに参加しました。消化器外科カンファレンスでは、各グループの術前症例が1症例あたり英語で要点をPowerPoint1枚、発表時間1～3分以内にまとめられており、症例数が多くてもテンポよく発表が進んでいました。また、グループの垣根を越えて質問が活発に飛び交っており、内容も興味深いものでした。火曜日夕方の大腸外科カンファレンスでは、科の垣根を越えて検討が必要な症例の提示と術後報告が行われていました。大腸外科に加え、呼吸器外科・肝胆膵外科や化学療法科、放射線科の先生も参加され、

他院で切除不能と判断されたものの根治切除を希望されている方や、人工肛門造設を拒否されている下部直腸癌の方、多発肝・肺転移症例などの困難症例も含めて、1回につき20例前後の検討を行っていました。カンファレンスでは科を超えた活発な議論がなされており、チームとして最善の治療を行うという熱意を感じるとともに、困難な症例に立ち向かうにはやはり外科医としての力量も必要だとも思いました。

レジデントの先生方は多忙な中でも病棟業務・手術手技の質を上げるべく、密に連携をとって動いておられました。その日の役割分担を2週間前から決めており、不測の事態が起こった際も、速やかに人員を確保して業務を進めておられました。また、手技に関しては、時間を見つけてロボット支援下手術の練習を積まれており、実際の手術でもスタッフの先生とともに執刀を任されている先生もいらっしゃいました。手術後に、「実は初めての執刀だった」と聞かされても信じられないほどの質で手術をされており、日頃の努力の大切さを教わりました。

大腸鏡視下手術初心者の段階での研修となりましたが、自分と大きく学年の変わらない先生方が、レジデントとして奮闘されている姿を目の当たりにすると、これまでしてきた自分の努力が本当に“努力”と呼べるものであったのか、これからどのように取り組むべきか見つめ直す良いきっかけになりました。また、エキスパートの先生方の手術を数多く見学させていただいたことで、この先の目標設定ができたように思います。このタイミングで、がん研有明病院大腸外科で研修させていただいて、本当に良かったです。

最後に、この場をお借りして福長洋介部長をはじめとした、がん研有明病院大腸外科の皆様重ねて御礼申し上げます。また、このような素晴らしい機会を与えてくださった、日本臨床外科学会の万代恭嗣会長ならびに国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめとした同委員会関係者の皆様、ご推薦いただきました宮崎県支部長の白尾一定先生、宮崎大学外科学講座肝胆膵外科学分野の七島篤志教授、4週間という長期間にも関わらず、快く送り出してくださいました当科教室員の皆様にも厚く御礼申し上げます。